足羽川河川環境整備検討会

第4回

議　事　骨　子

開催日時：　平成18年3月16日（木）　午後1時00分～午後4時00分

開催場所：　福井県教育センター　大ホール

◆　議事次第

1. 開会

2. 委員長挨拶

3. 審議

（1）第3回検討会での意見とその対応について

（2）河川環境整備計画（案）について

4. その他

5. 閉会

◆　議事骨子

1．第3回検討会議事骨子（案）について

第3回検討会議事骨子について、案のとおり承諾された。

2．審議について

事務局より（1）第3回検討会での意見とその対応について、（2）河川環境整備計画（案）について説明があり、意見交換が行なわれた。主な意見は以下に示すとおりである。

（1）計画全体

・　第4回検討会における議論のポイントは大きく3つの題目がある。1つは、従来の河川計画とは違って、町全体のために川を活かした計画であるということ。激特事業をまちづくりにも大いに寄与できるような形にインフラを整備しておこうという思想である。第2点は、河川全体のゾーニングについて、上流から下流まで全体の土地利用や環境保全と歴史、イベント利用などの視点から、きめ細かく整理したということ。第3点は、堤内地側の道路幅員などの制約の中でいかに桜堤を保全していくかということを審議したことである。

・　事務局の提案として将来の可能性を含んでいるような案となっており、現段階では非常によくまとまっている。

（2）河川環境について

1）自然環境

・　今回の整備案はよくまとまっていて、基本的な方向性について問題ないが、これを実際に設計図に落として施工していく過程で、検討会で議論したイメージが実際の整備で最終的に再現できるのかという課題が残る。現場において、フレキシブルに施工できるようにすることも大事であるが、その前提として、たとえば、横断図の中に現況と工事直後と、将来形について詳細なレベルで示し、どのような川にしようとしているかが設計・施工段階、さらには維持管理段階に具体的にしっかり伝わるようにしたほうがよい。また、そのフォローアップが重要であり、必要なら、節目節目で専門家などにアドバイスやチェックをもらうことも考えた方がよい。

・　事業推進のプロセス設計としてしっかり確立していく必要がある。

2）桜堤について

（桜堤全体）

・　福井市は桜堤案について了解されて、支援と協力するということで理解してよいか。

→【福井市】　検討委員会のメンバーとしてこれが最良だと認識している。ただし、道路の幅員の課題などあり、今後は行政のまとまった案として地権者と合意形成を図る、あるいは議会に意見を伺うといった手順が必要である。

・　桜堤を整備していく上では、近隣住民の1件1件の状況を見ながら、きちっと緻密に設計し、居住者、周辺住民のご理解をいただきながら進めていくことが必要である。

・　よりメリットを多くする工夫が必要である。側帯であれば緑化ブロックなど使用し、すぐ前のお宅の要望を聞いて住民自身が参加できる、いわば個人の畑、堤前の植採地として、お一人お一人が、希望に応じて参加可能な仕組みづくり。また、天端は広くなることで、ある意味公園に面した住宅と考えることもでき、堤上にアクセスできるような工夫も必要。

・　桜の管理で一番大変なのは、害虫駆除、それから雪害とか台風による枝葉折れ、倒木、

それと剪定の問題である。今年の12月の雪でも、70本ぐらい剪定した。市民からは、なぜ切るんだと、早く切れと、さまざまな意見があり、管理者として非常に苦労する点である。

- 観光部門で桜を管理しているが、観光の視点から10日間の桜の時期だけでなく、市民が集える足羽川という形から始めないと、観光に結びつけない。その意味で駅前と足羽川、これをつなげる今回の検討案は非常によい。
- 桜はライトアップすると木が弱ると聞いている。防犯のためであれば通路側だけライトを施すとか、そういう形で配慮が必要。
- 害虫対策の意味でも、生け垣とかそういうのが防護柵として機能するものと考えられる。生垣についても1種類と決めてしむのでなく、地元の材料を上手く利用して、場所に応じて検討していく必要がある。
-

（移植・多様性・多層性）

- 自然界というのは、いろんな年齢が上手に見事に調和している。土木的思想で画一的に植樹してはならない。多層性・多様性であれば、いろんな種類を上手に組み合わせて、庭園のように美しく植栽計画を立てる必要がある。
- 桜堤の多様性の考え方について、日本の河川整備の方向性では、自然のダイナミズム・自然のメカニズムをうまく活かした川づくりが主流であり、より自然に近いという意味からは逸脱しないものと考えられる。
- 植栽もそういう自然河川的な風景にしていこうという思想である。
- いろんな年齢の桜を植えるとことには大賛成であるが、他の桜の品種に関しては、植物園ではないので、何か似通ったものを植えるなど、一斉に咲いて、散るといったほうが個人的にはよい。
- 個体差はあるがソメイヨシノの花期は概ね1週間か10日で終わってしまう。桜の他種類を入れれば、花期は1カ月どころでなく、40日ぐらいまで延びる。今回の最大のねらいは自然に咲きながら、しかも雰囲気があって、長い時間味わって、しかもそこにはピンク系もホワイト系もいろんなものが混ざって、まさに生命社会のすばらしさみたいなものを感じてもらうことである。インパクトには弱いが、電飾効果で1色とするのとどちらが21世紀的かということで、多様性と多層性に富んだ風景を作っていく必要がある。

・　今ある木で立派な木、健康な木は移植して残し、これを骨格にする。そのベースはやっぱりソメイヨシノである。全体ベースにあるソメイヨシノ的な雰囲気が流れて、そこにいろんな種類が入ると、落ちついて、なおかつ変化に富んだ風景ができる。樹種や樹高など、樹木の個性を理解した人間が場所をしっかり調べて1本ずつ決めて植栽計画を立てていく必要がある。

・　桜の多様性について、福井県は雪国であり今年も70本近く枝の折損しており、景観的にも問題があることから、雪害を特に考慮すべきである。また、虫なども増えることから、それらに対応できる管理体制が必要である。

→【事務局】　専門家の植栽設計の分野の方の意見を聞いて、細かな設計は実施していきたいと考えるが、どこまでできるかについては、課題があることをご理解いただきたい。

（維持管理体制）

・　桜は植栽さえすればよいというものでなく、育てていかなければならない。それは激特でやる話ではなく、県、市、市民の協力体制で、より立派な花の名所をつくっていくソフトなシステム、組織づくりが必要である。

・　里親制度であれば、参加側の対価、メリットが重要となる。例えば桜の里親の会に入れば、1年に1回、イベントなどに参加できるなど。商工会議所青年部などが中心となって、意見交換すれば、幾らでもアイデアは出てくる。

・　桜の維持管理ではなく、桜を所有するという発想があってもよいのでは。債券を発行し、例えばお花見のときには優先席がとれたり、お孫さんの名前がつけられるなど、植樹の段階から桜に対して意識を持たせ、個人的に、もしくはグループで桜をきちんと管理していくという、若干ゲーム感覚の参加の仕組みがあってもよい。

・　桜のオーナー制度を10年ぐらい前から実施し、地元市民が桜に愛着をもっていただく活動を行っている。ただし、桜の将来像など、まだまだ議論が尽くされていない部分があった。また、桜の実質的な管理者である福井市にも参加していただき、当事者間での議論も必要である。桜のトンネルが、地域の住民の方々の生活の利便性を阻害するという部分もある。

・　以前、市民から数千万円単位の浄財が集められ福井市とともに足羽山の桜のオーナー

制度を実施したが、その後の中期的な組織体制が不十分であった。今後は母体となる組織、福井市と市民等の連携の軸をこの機会に作っていきたい。

（3）河川環境整備計画（案）

- 水辺空間の利用については、地理的な条件とかそこに生息する動植物の多様性を配慮して3つのゾーニングされている。1つの流域を3区分して、それぞれ個性を出していこうという取り組みは非常におもしろい。しかし、東京の隅田川などを見ていると、やはり管理主体によって、テクスチャーが別々であったりするので一体感を出しながら、個性をどう表現していくか配慮する必要がある。
- 整備・計画の段階からより多くの方々に実質的に参加をしていただく方法論があってもよかったのではないか。住民説明会やホームページなどで意見募集はしていたが、もっと具体的なイベント部会とか管理部会など開催し、市民団体の方やそれぞれ市民の方を含めて、もう少し細かな検討を行う場があってもよかったものと考えられる。都市河川の中では自然環境が残っており、あまりいろいろなイベントをやって、俗化し過ぎてもいけないのでは。利用推進を図っていく上で、ある種のルール・約束など協議していくなど。
- これからは障害者や高齢者の方たちの利用の配慮として、トイレ、駐車場からのアクセスの問題とか、水辺空間にすべての人が下りられるようなバリアフリーの配慮について、検討する必要がある。
- 激特の事業をきっかけとして、福井のまちづくりも含めて検討されたことは有難い。今後も短期、中期、長期と分けて継続的にまちづくりが進められていく必要がある。
- 市民は関心をもって検討会を見守っている。全部が賛成する案を作成することは不可能であり、この計画を数年後に適宜見直し、進めていく必要がある。
- この検討会では、時間の概念を踏まえたプランを検討してきた、ということ点で、全国のモデルとなりうる。
- 実際に地元に公表する際も、時間の手順が見える見せ方の工夫が必要である。地元のフォローも含めて、今回のプランの中で全国の川とまちづくりのモデルとかパイロット事業、社会実験になればよい。

→【事務局】　治水上の安全は確保する中で、段階施工、時間軸を見据えて具体的な絵をかいていきたい。

- 具体的な整備に際しては、財源調達の手法はどんな制度が最適かなど国の道路局だとか近畿地建の道路関係にいろいろとアドバイスを受ける必要がある。財源が決まらなければ、全く絵にかいたもちとなってしまう。
- 国としては当事者でないため、直接的にかかわりはもてないが、出来る限り協力する。
- どんなものがつくられたかということが現場でもわかるような工夫が必要。激特の事業において、堤防が最終にどのような形になったかなど公表していく必要がある。また、その維持管理、防災についても真剣にPRしていく必要がある。
- 福井城の石垣など、統一していてよい場所もある。ただ、統一と言っているのは、自然石で統一すると言っている。
- 基本方針について、すべて川づくりで語尾が占められているが、地域と足羽川が一体となったまちづくりという意図が伝わるように修正すべきである。
- 全国区の川のあるまちづくり、あるいはその町との関係でとらえた川づくりであり、激特事業の中で、災い転じて福と成すというのがまさにこのプロジェクトの一番大きな眼目である。